

# 中世後期イタリアにおける商業組織の発達と複式簿記の生成

## —会計史研究と経営史研究の接点を探って—

橋本 寿哉

### 要 旨

会計史研究と経営史研究は、本来、密接な関係にあると考えられるが、近年、両者は異なる分野としてそれぞれ独立して存在しているように思われる。こうした状況に鑑み、中世後期イタリアにおける複式簿記生成の歴史を素材として、両者の接点を探ることを試みた。従来、複式簿記生成史に関する研究は、専ら会計研究者によって、記帳形式等の進化プロセスの解明を中心に技術的側面に偏重して行われてきたが、視点を変えると、複式簿記が完全な姿を見せるに至るまでの会計実務の進化プロセスは、それが行われた商業組織の形態や管理体制等の発達と関係づけて5つのフェーズに分けて考えることができる。このような複式簿記生成史の新たな捉え方は、会計史研究と経営史研究の接点の存在を明らかにし、そうした理解に基づいて両者の関係性を回復させることは、混迷を深める現代経済社会において有益な指針を得るために不可欠である。

### 1. はじめに

会計学と経営学は、どちらも企業等の組織の経済的活動やその運営・管理に関わる事項について研究する極めて近接した学問分野である。実際、二つの学問分野の境界を明確に定めることは困難であり、また、複雑化した現代経済社会において、両学問分野の研究成果を融合した新たな知見が、ますます求められていると言ってよいであろう。

しかしながら、これら二つの学問分野における歴史研究の領域に限って言えば、近年は、両者にまたがる視野の広い研究成果は極めて少なく、それぞれが独立した異なる分野として存在しているように感じられる<sup>(1)</sup>。かつて、1960～70年台に、わが国の江戸時代の商家の経営実態の解明を目的とした研究が活発に行われ、そこでは会計帳簿類の分析そのものが研究の重要な一部を成し、会計史研究者と経営史研究者とが、それぞれの専門分野の垣根を越え、競い合って研究を進めた結果、多くの貴重な成果がもたらされたが<sup>(2)</sup>、こうした会計史研究と経営史研究の蜜月時代はもはや過去のものとなってしまった。特に、会計研究者が、経済のグローバル化の急速な進展を背景に、会計情報の有用性・価値関連性の検証、IFRS（国際財務報告基準）や公正価値会計の導入の検討等の今日的な課題への対応に忙殺される中で、会計の歴史に対する関心は著しく低下すると同時に、会計と経営の関わりへの歴史的なアプローチはほとんど見られなくなってしまった。また、経営史研究においても、会計数値を利用した研究がこれまでも数多く見られたが、それらがいかにして作られたのかといった点についての関心は低下し、財務諸表上の数

値をすべて客観的なものとして、安易かつ無批判に受け入れる姿勢が強まっているように思われる。以上の結果、会計史研究と経営史研究との真の意味での関わりについては、忘れ去られたような状況となっているのである。

本稿は、こうした状況に鑑み、会計史研究と経営史研究の関係を見直し、両者の接点を探る一つの試みである。本稿では、これまで専ら会計史的な側面から研究対象とされてきた中世後期イタリアにおける複式簿記生成の歴史を素材として採り上げ、このテーマについて、商業組織の発達という経営史的な観点から、従来の研究とは異なる捉え方を提示し、会計史研究と経営史研究との間に接点が存在することを明らかにしたい。接点の存在を明らかにすることは、そこから新たな知見が得られる可能性を拡げるとともに、学問分野をまたがった視野の広い歴史研究の意義を再認識することにもつながると考えられる。

## 2. 複式簿記生成史研究の意義と問題点

### (1) 複式簿記生成の歴史とその研究の意義

複式簿記は、今日、世界中の企業等の組織で実践される会計の基礎を成す記帳方式であり、複式簿記の生成をもって近代会計の始まりとされる。この複式簿記は、中世後期イタリアにおいて生成したとする見解が有力であり、本稿でもこの見解に基づいて考察を進める。

11世紀末に開始された十字軍の遠征を契機とする地中海交易の興隆とその後に続いたヨーロッパ内での商業活動の活発化の過程において、これらを先導したイタリア商人たちが行った商業活動実践の中から会計実務が生成し、進化を遂げ続けた結果、14世紀末までに今日我々が知る複式簿記が完全な姿を現すこととなった。ここでは、複式簿記を、資産、負債、資本、収益、費用の5つのカテゴリーから構成される完全な勘定体系を備え、企業体のすべての取引がこれらの勘定に複式記帳され、記帳された取引記録の勘定残高の集計から、企業体が一定期間に稼得した損益が、財産計算からも損益計算からも算出され得る完結した記帳方式と定義する。

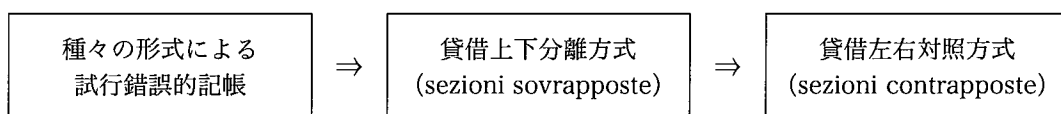
複式簿記は、決して理論に基づいて形作られたものではなく、商人たちの実務の中から生成したものである。それがいかにして生成したのかを明らかにすることは、会計の出発点を明らかにすることと同義であると考えられ、会計史研究の領域において中心的なテーマとして捉えられてきた。会計史研究は、複式簿記の起源を探ることから始まったと言っても過言ではなく、19世紀より、欧米諸国において、多くの研究成果が発表されてきた。また、これに影響を受ける形で、わが国においても、戦前から1970年代にかけて多くの研究成果が見られた<sup>(3)</sup>。

### (2) 従来の複式簿記生成史研究の問題点

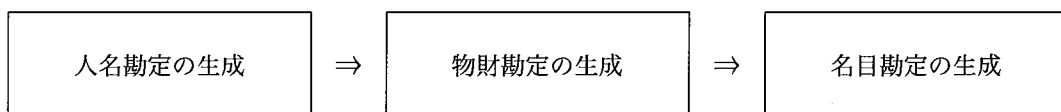
複式簿記の起源に関する研究は、当初、1494年に出版された複式簿記に関して記述した世界で最初の出版物として知られるルカ・パチョーリ (Luca Pacioli, 1445-1517) の『算術、幾何、比及び比例に関する総覧』*Summa de Arithmetica, Geometria, Proportioni et Proportionalita*の簿記論部分を現代語に翻訳することから開始され<sup>(4)</sup>、その後、20世紀に入ってから、中世

イタリア商人たちが記帳した会計帳簿類の発掘が行われ、それら史料の実証分析を中心に本格化していった。

しかし、これまでの複式簿記生成史の研究は、専ら会計研究者によって行われ、記帳形式等の進化プロセスの解明を中心とする技術的側面に偏重したものであったと言える。例えば、取引を貸借二面的に記帳する際の形式については、現存史料の分析の結果、以下の進化プロセスを経て、今日我々が知るものの原型が形作られたことが明らかにされた<sup>(5)</sup>。



また、商人の帳簿において複式簿記の要件を満たす完全な勘定体系が備えられるに至るまでには、段階を踏んで勘定のカテゴリーが増加していったと考えられ、現存史料の分析に基づく考察から、以下のプロセスにより諸種勘定が生成していったことが解明された<sup>(6)</sup>。



これらの成果は、複式簿記を記帳方式あるいは計算体系と捉えれば、その成り立ちを知る重要な歴史的事実の解明として意味をもつと考えられる。しかし、こうした技術的側面に偏重したものであったが故に、それ以上のことは何も明らかにしていないということもまた事実である。

それは、従来の研究において、複式簿記の生成を、中世後期イタリアの社会・経済的状况、当時の商人たちのメンタリティや心理等の諸要因との関わりにおいて捉えようとする学際的なアプローチがほとんど採られてこなかったことに原因があると考えられる。特に、会計実務は、商業活動を実践する組織体の運営や管理と密接に関係しているにも関わらず、そうした事項の歴史を研究対象とする経営史研究等の近接分野の知見を活用したアプローチさえもほとんど採られていなかったのである。

こうした問題の根底には、会計史研究者の間に、今日我々が知り実践する複式簿記を所与のものとし、これが完成されるまでのプロセスさえ解明されれば事足りるとする研究態度が存在していたことが考えられる。そこでは、複式簿記とは何であるのか、会計はなぜ複式簿記に基づいて実践されねばならないのか、複式簿記以外の記帳方式が産み出される可能性はなかったのか等、複式簿記あるいは会計の本質に迫るような問題意識がまったく見られなかったと言ってよい。現代経済社会において会計が果たす役割の重要性や一般の会計に対する関心の高まりにも関わらず、その基礎にある複式簿記の生成の歴史に関するこれまでの研究は、会計(史)研究者だけのものに止まっていたと言えるであろう。この状態のままでは、複式簿記生成史研究は蛸壺化し、研究者達の自己満足のためだけに行われる無意味なものになってしまう恐れがある。

### 3. 複式簿記生成史の新たな捉え方

#### (1)複式簿記生成史研究の新たな視点：商業組織のあり方と会計実務の相互作用

本章では、前章において検討したこれまでの複式簿記生成史研究の問題点を踏まえ、会計実務を技術的な側面だけに注目して考察するのではなく、それが実際に行われた中世後期イタリアにおける商業組織のあり方との関わりにおいて考察したいと思う。

会計実務は、それが行われる組織の事業内容、形態、管理体制（あるいは管理目的）等によってどうあるべきかが決定されるとともに、具体的に行われる会計実務の内容が組織のあり方にも大きな影響を与えていると考えることができる。

中世後期イタリアにおいて結成された商業組織は、海洋交易を行うために結成されたシンプルな共同企業から、最終的には、長期的な存続を前提とし、各地に多くの拠点を設けて複雑な業務を行い、管理と統制を必要とする大規模組織へと発展していった。その間、こうした組織で行われた会計実務の内容は一様ではなく、組織の発達に対応し、無数の試行錯誤を繰り返しながら、複式簿記としての完全な姿が形作られていくこととなる。一方、組織のあり方も、会計実務が進化し、従来よりも高度な計算や管理が実現されるようになったことにより、更なる発達を遂げていったと見ることができる。このように、商業組織の発達と会計実務の進化の相互作用という視点から、複式簿記生成の歴史を新たに捉えることができると考えられるのである。

#### (2)会計実務の生成から複式簿記完成までの段階的発展プロセス

中世後期イタリアにおいて、商人たちの商業実践の中から会計実務が生まれ、商業組織の発達とともに会計実務も進化を遂げた結果、遂に複式簿記が完成されたと考えれば、そのためには、海洋交易を行うために結成されたコンメンダ等の当座的共同企業において、初歩的な会計実務が生成した12世紀初頭から、その後続いたヨーロッパ内における陸上交易の発展の中で結成されたコンパニアと呼ばれる商業組織において、複式簿記を完成させ得る高度に体系化された会計実務が行われるようになる15世紀までの300年以上の歳月を要したことになる。

このおよそ300年に亘る会計実務の進化の歴史を、商業組織の発達との関わりにおいて捉えようとするならば、5つのフェーズに分けて考えることが有効であると思われる。以下、それぞれのフェーズについて見ていきたい。

#### 《フェーズ1》12世紀：海洋都市における当座的共同企業の結成と会計実務の萌芽

1096年に開始された十字軍の遠征は、東方の地において異教徒を取引相手にヨーロッパにおいて入手困難な産品を買い付け、これを持ち帰って高値で売りさばくという地中海を舞台とする海洋交易を活発化させる結果となったが、これに直接関与したヴェネツィアやジェノヴァ等のイタリア海洋都市の商人たちがこうした活動の発展を先導することとなった。

当時の海洋交易は、多大な利益を得ることが可能であった一方で、船の難破や遭難、海賊被害

等、極めてリスクが高かったことが特徴として挙げられる。こうした事態に、イタリア海洋都市の商人たちは、「コンメンダ (commenda)」や「ソキエタス・マリス (societas maris)」とよばれる当座的な共同企業を、航海ごとに、あるいは取り扱う商品ごとに、同時並行的にいくつも結成することでリスク分散を図って、活動を展開した<sup>(7)</sup>。

コンメンダ、ソキエタス・マリスのいずれも、当座的に結成された一種のパートナーシップであったが、資本を提供する「投資パートナー (commendator)」と実際に航海に出る「航海パートナー (tractator)」との間で、公証人が作成する契約文書に基づいて結成された。契約書には、航海の目的地、対象商品、結成期間、拠出資本額や利益分配比率等の詳細事項が明記されることが一般的であった。この時期、文字知識はまだ貴族や聖職者等の一部の限られた者だけのもので、商人たちには読み書きの能力が十分に備わっていなかったため、公証人が商業活動展開上も重要な役割を果たしていたのである。

このように結成された共同企業がどれだけの利益を上げ、その利益の分配が実際に契約通りに行われたのかどうかについては、ほとんど記録が残っておらず、詳細を知ることは困難である。しかし、そうしたことを窺い知ることができる史料が一例だけ現存している。それは、インゴ・ダ・ヴォルタとアンサルド・バイアラルドという二人のジェノヴァ商人の間で1156年から1158年の2年間に3回にわたって結成されたコンメンダ等の清算記録で、公証人であるジョヴァンニ・スクリーバによって記録されたものと考えられている<sup>(8)</sup>。

現存史料に見られる計算記録の内容は極めてシンプルで、毎航海終了時に、航海パートナーが持ち帰った商品や船舶等の財産すべてを市場価格で評価し、その合計から倉庫代等の未払費用を差し引いて航海終了後の純資産額を算出した後、ここから拠出資本を差し引いて、各航海によって得られた利益が算出されている。そして、算出された利益は、契約で予め定めた比率で分配計算が行われているのを見ることができる。

ここで見られた会計実務は、商人自らではなく公証人によって担われたものであったが、こうした実務が、その後の体系的な実務への発展の第一歩になったと考えられる。

## 《フェーズ2》13世紀後半：内陸都市におけるコンパニーアの生成とピランチオの作成

地中海交易の興隆によってもたらされた香辛料、絹製品、染料等の東方の産品は、ヨーロッパ内の消費動向に変化をもたらし、商品流通を活発化させ、ローマ帝国崩壊以来著しく停滞していた経済活動を生き返らせた。ここでも、イタリアの商人たちが活躍を見せることになる。

ヨーロッパ内の陸上交易は、東方の産品が持ち込まれるヴェネツィア等のイタリア海洋都市と北方ヨーロッパの主要都市を結ぶ交易路上に位置するイタリア内陸都市の商人たちによって担われた。彼らは、当初、個人や家族で、あるいは、「ソキエタス・テラエ (societas terrae)」とよばれる海洋都市で見られたのと同様の小規模な当座的共同企業を結成して、シャンパーニュの大市等に自ら商品を持ち運んで売りさばっていたが、その後、主要都市に派遣した駐在員や現地で代理人として契約した者に業務を行わせる等して、効率的に事業展開することが一般化していった。

13世紀後半になると、そうした動きを先導したフィレンツェを中心とするトスカーナ地方の商人たちの間で、「コンパニーア (compagnia)」<sup>(9)</sup>と呼ばれる商業組織が結成されるようになった。コンパニーアは、当座的な商業組織に比べて規模が格段に大きく、組織を率いる中心人物とその親族の他、血縁関係のない他者の出資も受け入れて結成され、結成期間は通常2～3年、最長で5年程度であった。海洋都市のコンメンダ等と異なり、結成に当たって出資とともに労働力の提供も全員に義務付けられ、他の商業組織との掛け持ちが禁止された。また、契約期間満了時に利益の算定が行われ、予め結成時の契約で定めた比率に基づいて出資者間で分配されることとされたが、出資資本がそのまま据え置かれ、同じメンバーによって同様の資本構成で再結成されるケースも多く、その場合は、実質的に、同一の商業組織が長期に亘って存続しているのと同じであった。こうした長期的な存続を前提とした商業組織が結成されたのは、陸上交易は海洋交易に比べてリスクが低く、比較的安定した環境で事業を継続的に展開できることが可能であったためであると考えられる。

コンパニーアにおいては、貿易と両替・銀行業が主軸事業として展開され、事業の円滑な運営・管理を行う必要から、現金や商品、債権・債務等について専用の会計帳簿が設けられ、詳細な記録と正確な計算が行われた。この時期までに、取引量や商圈の急速な拡大に伴い、もはや公証人に頼らず、商人たち自らも文字知識を習得することが必須とされていた。記帳に当たっては、公証人文書に倣った文章形式が用いられ、それは複式簿記完成に至るまで続けられることとなる。

また、おそらくは、銀行業務における債権・債務の振替や清算手続きの記録方法が端緒となって、取引の二面的な記帳が行われるようになり、13世紀末までには、あらゆる取引が二面的に記帳される実務が見られるようになった<sup>(10)</sup>。

こうして形成された正確な記帳実務は、コンパニーアが多数の出資者から構成されるが故に必要とされる正確な利益の算定と分配計算にも貢献することとなる。記帳対象となった種々の項目のうち、資産、負債及び資本に該当する諸勘定の残高を集計し、海洋都市においても見られたのと同じシンプルな財産法によって、利益を算定する実務が見られるようになった。それは、「ピランチオ (bilancio)」<sup>(11)</sup>と呼ばれる計算書の作成を通じて行われたが、そうした実務が一般のコンパニーアの間で定着するのに多くの時間を要しなかったと見られる。14世紀初頭には、ほとんどのコンパニーアでピランチオが作成されるようになり、こうして商人自らの手による体系的な会計実務が形成されたのであった。

### 《フェーズ3》14世紀前半：多拠点体制のコンパニーアと多帳簿記帳実務

14世紀に入ると、コンパニーアの組織規模の飛躍的な拡大が見られ、こうした変化に対応して会計実務の急速な発展が見られることとなった。

14世紀初頭に出現したバルディ (Bardi)、ペルッツィ (Peruzzi)、アッチャイウォーリ (Acciaiuoli) の三大商社は、フィレンツェの本部の他に、ヨーロッパ各地に多くの支店を設け、各支店では多くの人員を雇用したこれまでには見られなかった大規模商業組織であり、コンパ

ニーアのそれまでのあり方を大きく変えるものであった。ヨーロッパ内における商品需要の高まりに対応するため、これらの商社は急速にその規模を拡大させ、体制を整えたのであった。

このように組織や事業の規模が大きく拡大すると、組織内における業務のあり方も変化せざるを得なかった。すなわち、業務を細かく分割し、分担して行わせたのである。その結果、会計実務においても、業務ごとに専用の帳簿が設けられ、それぞれの業務の担当者がその記帳を行うという実務が定着することとなった。取引を二面的に記帳する実務は既に定着していたが、このような実務においては、時として、帳簿を跨って複式記帳が行われることもあった。

当初、それぞれのコンパニーアにおいて、独自に複数の帳簿を設けて記帳が行われたようだが、時間の経過とともに、帳簿の種類や形態が定まり、下記のような基本的・一般的な帳簿体系が完成された<sup>(12)</sup>。

◇基礎帳簿 … 日記帳、現金帳、営業経費帳、商品受払帳等

◇補助帳簿 … 資産台帳、不良債権帳、書簡帳等

◇最終帳簿 … 元帳、商品台帳、現金出納帳、秘密帳簿等

各支店で記帳されたこれらの複数の会計帳簿は、結成期間満了時にフィレンツェの本部にすべて提出された。そして、コンパニーアの出資パートナーが、「秘密帳簿 (libro segreto)」と呼ばれる帳簿に各帳簿に設定された勘定の残高を転記、集計してビランチオを作成し、財産法に基づいて利益算定を行った。

この時期のコンパニーアの会計実務の特徴をもっとも体現していたものが、この秘密帳簿であったと言える。この帳簿には、コンパニーアの結成契約文書が書き写された他、出資者の持分勘定や重要顧客の預金勘定等が設けられ、ビランチオも作成された。このように、秘密帳簿はコンパニーアの会計実務を総括する役割を担ったものであった。

以上のように、コンパニーアの規模拡大に伴って会計実務の進化が見られたが、この段階では、コンパニーアの出資パートナーたちの得るべき利益の算定や持分等を正確に記録し管理することが中心目的とされていたと言える。

#### 《フェーズ4》14世紀末：独立拠点組織と複式簿記の要件を満たす実務への進化

14世紀後半に入ると、ダティーニ商会に見られるように、コンパニーアの組織形態に進化が見られ、会計実務もこれに対応して、遂に複式簿記の要件を満たす実務への進化が見られることとなった。

ダティーニ商会は、フィレンツェ近郊のプラート (Prato) を本拠とし、フランチェスコ・ディ・マルコ・ダティーニ (Francesco di Marco Datini, ca. 1335-1410) という一人の商人によって構築された大規模商業組織であった。ダティーニは、ヨーロッパ各地に拠点を設けて事業を展開したが、それぞれを支店としてではなく、別個のコンパニーアとして設立したのであった。ダティーニは、いずれの拠点についても、実際に事業を行う拠点責任者との共同出資で設立したが、自らの出資比率は常に過半数を保ち、実際の拠点経営は共同経営者である拠点責任者に委任するものの、重要事項を決定する権限は自分だけのものとし、本拠のプラートから組織全体

を一人で統括した。

このような組織体制を敷いたダティーニは、各拠点の責任者に対して、一年ごとに会計帳簿を締め切り、勘定残高を集計して決算報告書を作成の上、提出するよう契約書上で義務付け、実際に行わせた。これまで、業務ごとの帳簿記入を担当者に行わせることはあっても、すべての勘定残高を集計して利益の算定を行うピランチオの作成は、コンパニーアの支配者である出資パートナーが行うことが一般的であったが、ダティーニ商会は、日々の記帳から損益算定までのすべての会計実務を支配下の者（この場合は、拠点責任者）に委任した最初の事例であったとされる<sup>(13)</sup>。こうした実務が形成されたのは、多くの拠点が存在する状況において、それぞれの拠点の出資者であるダティーニと拠点の責任者の間で分配されるべき正確な利益の算定のすべてを、ダティーニ自らが行うことが困難であったことにもよるが、中央から一人で巨大化した組織全体を最も効率的、効果的に支配しようとしたことと深く関係していると考えられる。

こうして報告のための会計実務が行われるようになり、それが毎年繰り返し行われるようになる中で、実務の体系化や統一化が図られていった。そして、その頃までに、名目勘定を含む完全な勘定体系が商人の帳簿上に整備される状況となっており、ピランチオ作成時には用いられなかった収益勘定と費用勘定によって損益法で算出される利益の額と、ピランチオの作成を通じて財産法によって算出される利益額とが一致する複式簿記の原理が「発見」されていた。そうした原理は、拠点責任者に委託した会計記帳実務の正確性を検証し、算出された分配利益の実在性を担保するのに極めて有効であることが認識され、その結果、会計実務が複式簿記の原理に基づいて行われるものへと転換していったのである。

こうして遂に複式簿記が、14世紀末にやっと完全な姿を見せるに至った。

### 《フェーズ5》15世紀：持株会社形態の組織体制と複式簿記の完全運用

14世紀末に、ダティーニ商会において複式簿記の定義を満たす実務が行われるようになったことが確認されたものの、それはまだ試行錯誤の段階に止まっていた。15世紀に入り、歴史上有名なメディチ銀行のような組織における実務の中で完全運用されたことで、複式簿記はまさしく完成されたのである。このことは、メディチ銀行の組織形態が、更なる発達を遂げたものであったことと密接に関係していたと見ることができる。

1397年に創設され、当初、ローマ法王庁の財政に関与し、ヨーロッパ各地に拠点を設けて発展を遂げたメディチ銀行は、創設者ジョヴァンニ・ディ・ピッチの後を継いだコジモ（Cosimo de' Medici, 1389-1464）が1435年に行った組織再編によって先進的な経営体制を構築し、その後、更なる発展を遂げることとなった。

組織再編に当たって、まず、コジモは、銀行の支配者であるメディチ家に次ぐナンバー2ポストの総支配人として任命した者との共同出資により、フィレンツェに本部組織を結成すると、次に、各地の拠点を、この本部組織と各拠点の責任者として任命した者との共同出資により、それぞれ別個のコンパニーアとして設立した。本部組織においてはメディチ家の、各拠点においては本部組織の出資比率を常に過半数に保ち、メディチ家による組織全体の支配は確固たるものと



された。こうして再編されたメディチ銀行の組織は、ド・ルーヴァーが指摘するように、近代的な持株会社制組織に極めて近いものであったが<sup>(14)</sup>、本部組織と各地の拠点のそれぞれにおいて、複式簿記を用いた体系的な会計実務が行われた。

拠点においては、毎年フィレンツェ暦の最終日である3月24日付ですべての帳簿を締め切り、勘定残高を集計して、収益と費用を対比させ、一年間に稼得した損益を算出した計算書、資産・負債・資本の明細表、これら明細表の貸借計上額合計を集計した計算書等からなる決算報告書一式が作成された。これらの決算報告書は、他の報告書類等とともにフィレンツェの本部組織に提出された。

本部組織では、総支配人が提出された各拠点の決算報告書の内容を厳しくチェックした後、秘密帳簿に設けられた拠点ごとの投資勘定と利益を計上するための勘定に、今日の連結財務諸表作成に当たって、非連結子会社や関連会社への投資に対して適用が要請される「持分法 (equity method)」と同様の方法で、年度ごとの利益が計上された。その後、各拠点及び本部組織の結成契約書で予め定めた比率に従い、出資者間で分配が行われたことも正しく記帳されている。

このような記帳により、メディチ銀行のすべての拠点で稼得された利益は、本部組織の秘密帳簿において会計上統合され、組織全体の経済的実質を捉えることができる体制が構築されたのであった。また、組織全体の支配者であるメディチ家の持分も、同時に帳簿上で管理が行われ得る状態となっていた。複式簿記は、巨大化した経営組織の管理と統制 (management and control) を行う上で欠かせないものとして認識され、こうして複式簿記が最終的に完成されたと考えられるのである。

#### 4. 総括

本稿では、会計史研究と経営史研究の接点を探る目的で、中世後期イタリアにおける複式簿記生成の歴史を素材として、両者の関係について考察してきた。これまでの考察から、商業組織の発達に対応して会計実務が生成・発達するとともに、会計実務の進化はその後の商業組織の発達に大きく影響していたことが明らかになった。すなわち、商業組織のあり方と会計実務とは、お互いに作用しあいながら発達を遂げ、遂に複式簿記という完結した記帳方式を完成させたのである。

複式簿記が、中世後期イタリアにおける商業組織の最終発展形態であると同時に、今日の企業組織の原型ともいえる「コンパニーア」と呼ばれる組織において完成されたことが確認されたことも、会計史研究と経営史研究との接点を考える上で、極めて重要な意味をもっていると言える。現代の企業組織にも共通する「コンパニーア」がもつ多様な性格が、さまざまな会計上の必要を生じさせ、そのことが遂に複式簿記を完成させ、近代会計の出発点となったのである。

まず、コンパニーアは長期的な存続を前提に結成されたものであったことから、一定期間ごとに会計帳簿を締め切り、経営成績や財政状態を知る必要を生じさせた。また、コンパニーアは、出資者を始めとする多くのステークホルダーを擁したことから、取引記録に基づいた正確な利害調整が必要とされた。具体的には、債権・債務関係の明確化や稼得した利益の正確な算定と分配

等が挙げられる。更に、多くの拠点を含む巨大な組織体制になると、これら組織全体を効率的かつ効果的に管理する必要が生じ、各拠点から会計報告を行わせることによってこれを実現する方策がとられることとなった。報告を義務付けられた拠点責任者にとっては、会計報告によって、拠点経営の受託責任から解除されることとなり、こうした手続きが正当に行われるために、正確で体系的な記帳が不可欠とされた。以上のような諸要因が複雑に絡み合いながらも、これらを総合的に解決する会計的な記帳の方法として、複式簿記という一つの完結した記帳体系が完成されたと考えることができるのである。

このような複式簿記生成史の新たな捉え方は、会計史研究と経営史研究との密接な関係性を前提にした考察に基づいて初めて可能になったものであった。以上のような考察からは、複式簿記（あるいは「会計」と呼ばれるもの）は、理論に基づいて形成された技術や手法ではなく、実務の積み重ねの上に完成されたものであったことが再認識される。すなわち、数世紀の時間を要して組織運営実践の試行錯誤の中から生まれた経営管理のための一つの体系（システム）であったと見ることができるのである。こうした理解により、複式簿記生成史研究によって得られた知見は、経営組織の成り立ちやその性格等の解明といった経営史研究の発展にも大きく貢献し得ることも考えることができるようになる。

以上のように、現在ではそれぞれ独立して存在しているかのように見られる会計史研究と経営史研究とは、極めて近い関係にあり、実際にはその接点が数多く存在していると考えることができる。会計史研究は、これまでの技術的側面偏重の姿勢を改め、広い視野の下で、経営史研究等の近接分野との関係強化を図る必要がある。また、経営史研究においては、単なる会計数値の利用にとどまらず、そうした数値が作成される手続きやその発展プロセス等の具体的な会計実務のあり方への踏み込んだアプローチも必要とされよう。企業においてどのような計数的な管理のシステム（すなわち会計実務）が構築されるかは、そのこと自体、経営者の意思決定とも密接に関係する経営史研究における重要なテーマであると言ってよい。

このように会計史研究と経営史研究との関係を密接に保つことにより、これまでに得ることのできなかつた新たな知見が得られる可能性が拡がることになる。こうして得られる知見は、複雑化し混迷を深める現代経済社会において、我々が進むべき方向を探るに当たって不可欠なものであることに疑う余地はないであろう。

## 注

- (1) その理由の一つとして、「会計史研究者と他の歴史研究分野の研究者、たとえば経営史や経済史といった他の社会科学分野の歴史研究者との交流も、個人的なつながりは別にして、組織的に十分に行われていない」（中野他 [2009] 98頁）ことが指摘されている。
- (2) 会計研究者による江戸時代の会計（帳合法）と経営にまたがる研究成果として、小倉 [1962]、同 [1966] 等が挙げられる他、経済史・経営史研究者による帳合法に関する研究成果として、宮本 [1957]、作道 [1966]、安岡 [1970]、新保 [1971] 等が主要なものとして挙げられる。
- (3) 中野他 [2009] 81-82頁。
- (4) 茂木 [1969] 25頁。

- (5) Melis [1950] p. 429.
- (6) 木村 [1972] 24-41頁、中野 [2007] 4-11頁。
- (7) コンメンダの起源についてはいくつかの説があるが、詳しいことはわかっていない。イタリアでは、976年にヴェネツィアでコレガンツァ (colleganza、コンメンダのヴェネツィアにおける呼称) に関して初めて言及された記録があり、現存する最古の公証人文書としては1073年のものがある。Cf. Pryor [1977] p. 13.
- (8) 詳細については、De Roover, F. E. [1956] 及び橋本 [2009] 94-102頁を参照されたい。
- (9) compagniaは、「ともにパンを食べる仲間」を意味するラテン語のcum panisに由来する。Cf. Lopez & Raymond [1955] p. 185.
- (10) すべての営業取引が例外なく二面的に記帳された最古の会計帳簿として、1296年から1305年にかけて、シャーパーニュの大市で行われた金銭貸借及び商品売買取引を記帳した「リニエリ・フィニーの元帳」が知られる。詳細については、橋本 [2009] 189-192頁を参照されたい。
- (11) 「ピランチオ」は、「天秤」を意味するbilanciaが語源となっており、現代イタリア語では貸借対照表を意味する。しかし、当時作成されたピランチオは、財政状態を示す今日の貸借対照表と異なり、財産法による利益算定と分配計算を行うために作成されたものであったことから、そのまま「ピランチオ」と呼ぶことが通例となっている。
- (12) Melis [1962] pp. 357-358.
- (13) Melis [1962] p. 342.
- (14) De Roover [1963] p. 81.

## 参考文献

- De Roover, Florence Edler [1956] "Partnership Accounts in Twelfth Century Genoa," in Littleton, A. C. and Yamey, B. S. eds., *Studies in the History of Accounting*, London, Sweet & Maxwell.
- De Roover, Raymond [1956] "The Development of Accounting Prior to Luca Pacioli According to the Account-books of Medieval Merchants," in Littleton, A. C. and Yamey, B. S. eds., *Studies in the History of Accounting*, London, Sweet & Maxwell.
- [1963] *The Rise and Decline of the Medici Bank, 1397-1494*, Cambridge, Harvard University Press.
- [1971] "The Organization of Trade," in Postan, M. M., Rich, E. E. and Miller, Edward eds., *The Cambridge Economic History of Europe, Volume III: Economic Organization and Policies in the Middle Ages*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Hunt, Edwin [1994] *The Medieval Super-companies: A Study of the Peruzzi Company of Florence*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Lopez, Robert & Raymond, Irving [1955] *Medieval Trade in the Mediterranean World: Illustrative Documents Translated with Introductions and Notes*, New York, Columbia University Press.
- Melis, Federigo [1950] *Storia della ragioneria: Contributo alla conoscenza e interpretazione delle fonti più significative della storia economica*, Bologna, Cezare Zuffi.
- [1962] *Aspetti della vita economica medievale: Studi nell'Archivio Datini di Prato*, Siena, Monte dei Paschi di Siena.
- Pryor, John H. [1977] "The Origins of the Commenda Contract," *Speculum: A Journal of Medieval Studies*, Vol. 52, No. 1.
- Renouard, Yves [1949] *Les hommes d'affaires italiens du moyen âge*, Paris, Librairie Armand Colin.
- Sapori, Armando [1955] *Studi di storia economica (Secoli XIII-XIV-XV)*, Firenze, G. C. Sansoni.

- 泉谷勝美 [1997] 『スンマへの径』 森山書店。
- 小倉榮一郎 [1962] 『江州中井家帖合の法』 ミネルヴァ書房。  
—— [1966] 「経営管理と中井家帳合法」 『社会経済史学』 社会経済史学会、第31巻 第6号。
- 木村和三郎 [1972] 「複式簿記の成立過程」 同著 『科学としての会計学 (下)』 有斐閣。
- 作道洋太郎 [1966] 「鴻池両替店の帳合法」 『社会経済史学』 社会経済史学会、第32巻 第2号。
- 新保 博 [1971] 「わが国在来帳合法の成立と構造：近世簿記発達史についての一試論」 『国民経済雑誌』 神戸大学経済経営学会、第123巻 第4号。
- 鈴木良隆 [2005] 「会計史学と経営史学との交渉」 『会計史学会年報』 日本会計史学会、第23号。
- 中野常男 [2007] 「複式簿記の基本構造とその成立過程」 同編著 『複式簿記の構造と機能—過去・現在・未来—』 同文館出版。
- 中野常男・橋本武久・清水泰洋・桑原正行 [2009] 「わが国における会計史研究の軌跡—『會計』に見る会計史文献の史的分析：1917～2008年—」 『経営研究』 神戸大学大学院経営学研究科、No. 55。
- 橋本寿哉 [2009] 『中世イタリア複式簿記生成史』 白桃書房。  
—— [2011] 「ダティエニ商会における経営組織の発展過程に関する一考察—コンパニエア結成契約書の分析から—」 『経研論集』 大東文化大学大学院経済学研究科・経営学研究科、第27号。  
—— [2013a] 「メディチ銀行の経営組織と拠点管理」 『経済研究』 大東文化大学経済研究所、第26号。  
—— [2013b] 「メディチ銀行本部の秘密帳簿と会計実務」 『環境創造』 大東文化大学環境創造学会、第18号。
- 茂木虎雄 [1969] 『近代会計成立史論』 未来社。
- 宮本又次 [1957] 「江戸時代の帳簿と帳合」 『大阪大学経済学』 大阪大学大学院経済学研究科資料室、第6巻 第3・4号。
- 安岡重明 [1970] 『財閥形成史の研究』 ミネルヴァ書房。

\*本稿は、2014年9月13日に文京学院大学で開催された経営史学会第50回全国大会のパネルセッション「会計史研究と経営史研究—両者の接点を探る—」において、筆者が報告した内容を基礎としている。